

<開催趣旨>

本シンポジウムの背景として、特に以下の3点があげられる。それは1)アフリカ諸国の学会が社会経済開発に向けた実学振興に邁進するなかで、人文・社会科学および学際的研究による基礎研究蓄積が重要となる点、2)「研究者／調査対象の関係は支配／被支配の関係にあり、そうした関係が研究情報を得る過程および学術的記述そのものに反映される」という批判、3)今日のアフリカ研究者が2の課題をいかに乗り越えているのか／今後乗り越えられるのかを、多分野に浸透したフィールドワークのアプローチや手法の多様な展開から検討する必要性、である。

今日、アフリカ諸国の学会のなかで、人文・社会科学や学際的分野の研究がどのような意義をもつかを検討する動きがある。それは社会経済開発のための実学振興に邁進する研究が多数あるなかで、上記学問分野が基礎研究にとりくみ、アフリカ研究発展に寄与する重要性が再認識されていることと関連している。

また日本のアフリカ研究においては、遠く離れたアフリカへ調査研究に赴こうとする研究者が多分野にわたり出現するなかで、各研究課題へのアプローチや手法が多様化・複雑化している。人類学・地域研究を例に挙げれば、他者へのアプローチ、すなわち文献資料やフィールドワークを通じた現地社会へのアプローチの在り方や方法について明示することが、一層不可避なものとなっていることが指摘されてきた。

人類学では、1960年代から「ドルや円を手にした人類学者が、現地の人を調査助手に雇い、インフォーマントに謝礼を渡しながら情報を買集める行為が、フィールドワークという美名のもとでいたるところでおこなわれていた(松田・川田 2002:14)」ものとして鋭い政治的批判を浴びた。その後人類学が度重なるパラダイム転換を遂げるなか、人類学者は調査対象であるアフリカ社会といかなる関係性のもとでフィールドワークをすすめるべきか、学術的記述をするべきか、という問いを絶えず突きつけられた。

また、歴史学においても、歴史を記述する側やアフリカの諸地域をめぐる様々な権力関係が絶えず意識されている。歴史学者は、文書館の各種資料をはじめ、フィールドワークを通じて口頭伝承やライフヒストリーなど様々な史料を取得する。そうして得られる史料について、歴史学者は権威と権力、被支配者らの相互的關係が投影されるものとして捉えている。そして多角的視点をもって歴史の生成過程を再検討し記述するのである。

以上で指摘したことは、人類学や歴史学にとどまらず、「開発途上」地域の他者(異文化)を理解し記述しようとする、アフリカ研究全体の問題としても自覚すべき危機的側面を示している。またそうした今日の状況にあって、アフリカ研究者は意識的にも無

意識的にも、「強者による強力な権力行使」といういわれを乗り越え、発想、観察、分析、記述、理解といった一連の知の体系を再検討する営みを続けている。この営みは、これからのアフリカ研究の発展を左右する不可避の挑戦といえることができる。

以上の問題意識に基づいて、本基幹研究は、アフリカ研究で広く用いられるフィールドワークによる現地情報の取得や分析の手法について検討するシンポジウムを開催するに至った。そして本シンポジウムは、これまで連携してきた国内外のアフリカ研究者やその調査助手とともに、フィールドワークのプロセスで多様なアクター間の関係が相互に関連しながら情報の取得・分析が進められることについて特に焦点をあてた。

また以下に記す本シンポジウムの目的を達成するため、アフリカに拠点をおき、古くから日本・アフリカそれぞれの研究者と連携してきた日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターと共催した。

<本シンポジウムの目的>

本シンポジウムは、フィールドワークに基軸をおいた学際的研究をすすめる日本と東アフリカ双方の人類学、社会学、地域研究の研究者およびその調査助手が参加した。そして参加者それぞれの事例をもとに、フィールドワークの手法・アプローチと社会的意義について多角的に議論することを第1の目的とした。また、第2の目的は、日本・アフリカ双方における最新の調査研究動向を共有し、フィールドワークに基づくアフリカ研究の情報取得・分析の課題や新たな可能性を議論することである。

本シンポジウムは以上の目的を達成することを通じて、今日のアフリカ研究における学際的研究の諸課題や意義を列挙し、調査者／調査対象という2元的な関係理解に基づく他者の記述を超越する方途を探究する基盤形成を目指した。またそれによって、アフリカ研究に新地平を拓く共同研究構想を見出すことを試みた。

<当日の様子>

本シンポジウムは、ナイロビ研究連絡センターでおこなわれた。演者はケニア(4人)、ウガンダ(2人)、日本(6人)の、いずれもフィールドワークをおこなう研究者である。参加者はナイロビ在住の若手日本人研究者(公衆衛生学、文化人類学など)らがであった。

参加人数は、一日目が18人、2日目が17人であった。シンポジウム全体を通じて、非常に親密な雰囲気の中での議論がおこなわれた。具体的には、現行の調査成果、これからの研究構想、調査研究活動の問い直し、調査研究をひろく社会的文脈から議論するなど、新しいアイデアももちよって意見を交わすことができ、有意義な場となった。(詳細は別ページへ)

<総括>

当日のシンポジウムで交わされた、特徴的な議論は大きく2つある。まず、現地における社会的変化のプロセスとしてフィールドワークを捉えようとする議論である。いくつかの発表では、フィールドワークについて、調査者が地域住民との個別かつ相互の関係の構築を通じて現地社会に受容・包摂されていくプロセスとして捉えたものがあった。それは特に、フィールドワークを通じて調査者が現地社会へ与える影響について、調査助手や個々の地域住民からのレスポンスを通じて紹介していた。これまでほぼ等閑視されていた調査助手による報告は、調査者の視点から語られることの多かった現地社会における変化のプロセスと今後総合することで、現地の社会変化に関する新たな研究成果をもたらす可能性を示すものといえる。また、調査助手によって日本人調査者による調査プロジェクトを捉え直す試みもあるなど、共同研究にむけ潜在する可能性を見出すことができた。

また、いま一つ特徴的であったのは、今後の新たな共同研究にむけて、実際にこれまでおこなわれてきた共同研究の例を紹介し、そこでみられる創造的な調査研究手法や社会的効果などを再検討しようとする議論である。これは研究者と調査対象とに構築される多様な関係に注目することでこれまでの課題を乗り越え、アフリカ研究の新地平を拓く試みの第一歩として非常に重要であった。ここで注目された点は①フィールドでの発見を出発点に、研究者がなにを考え、いかなる戦略でその調査研究を着想し計画したかという点、②研究者が日本／アフリカの多様なアクターと構築した関係をもとに調査手法を編み出していく点、などであった。そのため、調査の経緯や、膨大なデータ分析の説明が詳細になされた。そうして浮かび上がった今後の共同研究の可能性は、日本およびアフリカ人研究者双方の関心を得ていた。

本シンポジウムで浮かび上がった今後の課題は以下のとおりである。総合討論でアフリカ研究者らが触れたが、こうした意見交換や問題を共有する場が、残念ながらまだまだ限られている。さらに、アフリカにおける資料蓄積やその他研究環境の改善はいうまでもないが、日本やアフリカ各地に分散する研究者の情報共有のプラットフォームづくりも緊急の課題として指摘された。

以上の総括から、本基幹研究が、アフリカ研究者らや調査に関わる多様なアクターと議論や情報共有の場を継続的にもつよう試みていくことは、今日のアフリカ研究と、共同研究拠点としてアフリカ研究を先導することにもつながる、重要なものといえる。

参考文献

松田素二, 川田牧人(2002)「エスノグラフィー・ガイドブック—現代世界を複眼でみる」嵯峨野書院。